

トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』 第六項 試訳

石田 隆太

はじめに

本稿は、トマス・アクィナスによる『定期討論集 靈的被造物について』(*Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*)の全訳を目指す試みの一環であり、以下の続編である。

石田隆太「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第一項 試訳」, 『宗教学・比較思想学論集』, 第15号, pp.33-57, 2014年. [石田2014aと略記]

同「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第二項 試訳」, 『筑波哲学』, 第22号, pp.129-153, 2014年. [石田2014bと略記]

同「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第三項 試訳」, 『宗教学・比較思想学論集』, 第16号, pp.57-91, 2015年. [石田2015と略記]

同「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第四項 試訳」, 『古典古代学』, 第8号, pp.31-56, 2016年. [石田2016aと略記]

同「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第五項 試訳」, 『宗教学・比較思想学論集』, 第17号, pp.105-127, 2016年. [石田2016bと略記]

この試訳の主要な意図に関してはこれまでの稿を参照されたい。以下では、これまでの稿と度々重複するところではあるが、便宜のために凡例を載せることとする。

凡例

・訳出にあたっては次のレオ版を底本とした。

COS, J. ed. *Sancti Thomae de Aquino Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, t.24.2:

Quaestio disputata de spiritualibus creaturis. Roma-Paris: Commissio Leonina-Éditions du Cerf, 2000.

- ・他の版としては次の批判的校訂版も参照した。

KEELER, L. W. ed. *Sancti Thomae Aquinatis Tractatus de spiritualibus creaturis*. Romae: Apud Aedes Universitatis Gregoriana, 1946. [Keeler と略記]

- ・ただし、レオ版のテキストにはいくつか読解に難のある箇所があるため、場合によって次のものが提案する読みに従った。

GULDENTOPS, G. & STEEL, C. “Critical Study: The Leonine edition of *De spiritualibus creaturis*.” *Recherches de théologie et philosophie médiévales*, 68(1), pp.180-203, 2001. [G&S と略記]

- ・参照した『定期討論集 靈的被造物について』の近代語訳は次の通りである。

BRENET, J.-B. *Les créatures spirituelles*. Paris: J. Vrin, 2010. [仏訳]

FITZPATRICK, M. C. *On Spiritual Creatures*. Milwaukee: Marquette University Press, 1949. [英訳]

GOODWIN, C. R. “A Translation of the *Quaestio disputata de spiritualibus creaturis* of St Thomas Aquinas, with Accompanying Notes.” M. A. thesis, Australian Catholic University, 2002. [英訳]

SAVAGNONE, G. “Le creature spirituali.” In S. Tommaso d’Aquino, *Le questioni disputate*, vol.4, pp.524-809. Bologna: Edizioni Studio Domenicano, 2001. [伊訳]

- ・訳者自身による訳文中の [] は訳者による補いであり，〔 〕 は原語の引用である。

- ・訳語の選定にあたってはトマス・アクィナスによる著作の既存の日本語訳等を参照したが，参照したものの一例として次のものを挙げておく。

長倉久子，蒔苗暢夫，大森正樹編『トマス・アクィナス「神学大全」語彙集（羅和）』，新世社，1988年。

- ・註にて使用した略記の一覧は次の通りである（上で示したものは除く）。なお慣例に従い，アリストテレスの著作にはベッカー版の頁数と行数を付した。

Col.

Beati Doctoris Ecclesiae Alberti Magni Ordinis Fratrum Praedicatorum Episcopi Opera omnia ad fidem codicum manuscriptorum edenda apparatu critico notis prolegomenis indicibus instruenda curavit Institutum Alberti Magni Coloniense. Monasterii

Westfolorum in aedibus Aschendorff, 1951-.

DP

“Quaestiones disputatae de potentia.” In *S. Thomae Aquinatis doctoris angelici Quaestiones disputatae*, vol.2, pp.7-275. Ed. BAZZI, P., CALCATERRA, M., CENTI, T. S., ODETTO, E. & PESSON, P. M. Taurini-Romae: Marietti, 1965¹⁰ (1949¹).

EMA

S. Thomae Aquinatis doctoris angelici In duodecim libros Metaphysicorum Aristotelis expositio. Ed. CATHALA, M.-R., SPIAZZI, R. M. Taurini-Romae: Marietti, 1977³ (1950¹).

L.

Sancti Thomae de Aquino Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita. Romae, 1882-.

Long

Diogenis Laertii Vitae philosophorum. Ed. LONG, H. S. Oxonii : E Typographeo Clarendoniano, 1964.

Pattin

PATTIN, A. “Le Liber de causis. Édition établi à l’aide de 90 manuscrits avec introduction et notes.” *Tijdschrift voor Philosophie* 28, pp.90-203, 1966.

PG

Patrologiae cursus completus omnium SS. Patrum, doctorum scriptorumque ecclesiasticorum sive Latinorum, sive Graecorum. Series Graeca. Ed. MIGNE, J.-P. Parisiis, 1857-1868.

PL

Patrologiae cursus completus omnium SS. Patrum, doctorum scriptorumque ecclesiasticorum sive Latinorum, sive Graecorum. Series Latina. Ed. MIGNE, J.-P. Parisiis, 2 ed.

QR

Doctoris Seraphici S. Bonaventurae Opera omnia. Claras Aquas, Quaracchi: Typographica Collegii S. Bonaventurae, 1882-1889.

SS

S. Thomae Aquinatis doctoris communis Ecclesiae Scriptum super libros Sententiarum magistri Petri Lombardi. Ed. MANDONNET, P. & MOOS, M. F. Parisiis: P. Lethielleux,

1929-1947.

Venetiis

Aristotelis Opera cum Averrois commentariis. Venetiis: Apud Junctas, 1562-1574.

Willis

Ambrosii Theodosii Macrobiani Commentarii in somnium Scipionis. Ed. WILLIS, I.

Leipzig: BSB B. G. Teubner Verlagsgesellschaft, 1970.

アウグスティヌス著作集

『アウグスティヌス著作集』第1巻-, 教文館, 1979年-.

アリストテレス全集旧

出隆監修『アリストテレス全集』第1-17巻, 岩波書店, 1968-73年.

アリストテレス全集新

内山勝利, 神崎繁, 中畑正志編『アリストテレス全集』第1巻-, 岩波書店, 2013年-.

石田 2014b (前掲)

キリスト教神秘主義著作集

『キリスト教神秘主義著作集』第1巻-, 教文館, 1989年-.

原因論

「原因論」(『原因論 聖トマス・デ・アクィノ原因論註解』ヴェンサン・マリー・プリオット 大鹿一正共訳, 聖トマス学院, 1967年, 所収) pp.46-115.

諸原理について

オリゲネス『諸原理について』小高毅訳, 創文社, 1978年.

神学大全

トマス・アクィナス『神学大全』第1-45冊, 高田三郎ほか訳, 創文社, 1960-2012年.

心身問題

トマス・アクィナス『トマス・アクィナスの心身問題——『対異教徒大全』第2巻より——』川添信介訳註, 知泉書館, 2009年.

真理論

トマス・アクィナス「摂理と予定(真理論 第5, 6問題)」山本耕平訳, 『聖カタリナ女子大学キリスト教研究所紀要』第6号, pp.101-178, 2003年.

中世思想原典集成

上智大学中世思想研究所 監修『中世思想原典集成』第1-20巻, 平凡社, 1992-2002年.

デ・アニマ註解

トマス・アクィナス「『「デ・アニマ」註解』第II巻 第2章, 第3章, 第4章」加藤雅人, 関沢和泉, 大月栄子, 松根伸治訳, *Kansai University Informatics Working Paper Series*, No.6, pp.1-19, 1997年.

- ・本稿では註にて他の文献からの引用を大量に行っているが, その中で特に引用元を明記していない日本語訳はすべて拙訳であることを断っておく.
- ・本稿の作成にあたって小沢隆之(慶應義塾大学)から有益な指摘を頂戴した. この場を借りて感謝申し上げる.

試訳

靈的被造物について

第六項¹

第六に問題とされるのは, 靈的実体が天体と合一するか否かである.

【異論】

然りと思われる. その理由は以下の通りである.

一. ディオニュシオスは『神名論』第七章で, 神の知恵は「第一のものの終極を第二のものの始原に結合する」と言う². このことから解されうるのは, 自分の最高点にいる, より下位の本性は, 自分の最低部にいる, より上位の本性に達するということである. ところで, 物的本性において最高のもは天体である一方, 靈的本性において最低のもは魂である. それゆえ, 天体は魂化されている [animatum].

二. さらには, より高貴な物体にはより高貴な形相が属す. ところで, 天体は物体の中で最も高貴であり, また魂は形相の中で最も高貴である. それゆえ, もし何らかのより下位の物体が魂化されていれば, ましてなおさら天体は魂化されていることになるだろう³.

三. しかし次のように言う人がいた. 天体は魂化されていないが, それでもその物体 [天体] がそれによって物体であるような形相は人間の身体がそれによって身体であるような形相よりも高貴である, と. これに反対する. 人間の身体には, 理性

的魂以外で身体に存在を与える他の実体形相があるか、それともないかである。もしそれがなくて、〔理性的〕魂が形相の中で最も高貴であるがゆえに魂自身が身体に実体存在〔esse substantiale〕を与えるならば、人間の身体がそれを通じて身体であるような形相は天体がそれを通じて物体であるような形相よりも高貴であるということが帰結するだろう。他方で、もし人間には理性的魂以外で身体に存在を与える他の実体形相があるとすれば、人間の身体が理性的魂の授かり手〔susceptivum〕になるのはその形相を通じてであろうということは明白である。ところで、完全な善性の授かり手であるものは授かり手でないものよりも善であり、それは『天地論』第二巻で言われる通りである⁴。それゆえ、もし天体が理性的魂の授かり手ではないならば、人間の身体がそれを通じて身体であるような形相は天体がそれを通じて物体であるような形相よりも高貴であるということが依然として帰結するだろう。〔だが〕これは不適當なことであると思われる。

四. さらに、物体がそれに対して本性的に傾くようなものがかなる物体にも拒否されないということを宇宙の完全性は要求する一方で、すべての物体は自分の作用のために要するものに対する本性的傾向性を持つ。ところで、天体に固有な作用は円環運動であり、その運動のために天体は靈の実体を要する。その理由は次の通り：この運動は、重いものや軽いものの運動のように何らかの物的形相を随伴することができない。なぜなら、〔もし何らかの物的形相を随伴するのであれば〕重いものや軽いものにおいて生じるように運動が何らか規定された在り処にまで至ると止まらなければならないであろうが、こうしたことが偽であることは明らかであるからである。それゆえ、天体が自分と合一した靈の実体を持つということしか残されない。〔以上がその理由である。〕

五. さらに、何らかの態勢〔dispositio〕において存在しながら本性的に動かされるものはすべて、自分の在り処の外に存在する重い物体や軽い物体のように、ただ強制的な仕方によってのみ同じ態勢において存在しながら静止しうる。しかるに、もし天の運動が自然的形相によるものであるとすれば、天は任意の在り処に存在しながら本性的に動かされなければならない。それゆえ、静止すると措定される在り処ならどこであれ、天は強制力を通じてのみ静止する⁵。ところで、強制されたものは何も永続的ではありえない⁶。それゆえ、信仰に即してわれわれが措定するように審判の日の後に天が永続的に静止するのではないことになるであろう。それゆえ、これは不適合なことであるのだから、天は意志的運動によって動かされると言うの

が必然だと思われるのであるからして、天は魂化されているであろうということが帰結する。

六. さらには、任意の類において自体的にあるものは他のものを通じてあるものよりも先なるものである⁷。しかるに、天は可動的なもの類において第一のものである。それゆえ、天は自分自身を動かすものとして自体的に動かされるものである。ところで、自分自身を動かすものはすべて二つの部分に分割される。それらの内の一方は魂のように意欲を通じて動かす部分であり、他方は身体のように動かされる部分である⁸。したがって、天体は魂化されている⁹。

七. さらには、全体的に外在的な動原から動かされるものはどれも自然的運動を持たない。それゆえ、天の運動は霊的実体によるものである——アウグスティヌスの『三位一体論』第三巻によれば神は霊的実体を通じて物体的実体を統御するがゆえに¹⁰——のだから、もしその実体が天と合一するのではなくて全体的に外在的であるとしたならば、天の運動は本性的なものではなかったことになるであろうが、これは『天について』第一巻での哲学者[アリストテレス]に反することである¹¹。

八. さらには、天を動かす霊的実体は、もしそれがたんに外在的であるとしたならば、意志することだけで天を動かすとは言われえなかったことになるであろう。なぜなら、その場合その実体の意志することがその能動すること[agere]であったことになる——それは神にのみ属することである——であろうからである。したがって、[天を]動かすためにその実体は何かを派遣しなければならなかったことになるであろうし、かくして、その実体の力は有限であるのだから、長時間にわたって動かす際にその実体に疲労が生じるということが帰結したことになるであろう¹²、これはとりわけ運動の永遠性を措定する人々にしても不適合なことである。それゆえ、天を動かす霊的実体は天と合一している。

九. さらには、[アリストテレスの]『自然学』第八巻で認められるのと同様に、より下位の天球の動原は附帯的に動かされる一方で、より上位の天球の動原はそうではない¹³。しかるに、より上位の天球の動原は動原として自分の天球と合一する。それゆえ、より下位の天球の動原は動原としてだけでなく形相としてもその天球と合一する。かくして少なくともより下位の天球は魂化されている。

十. さらには、[アリストテレスの]『形而上学』第十一巻に対して註解者[アヴェロエス]が言うように、分離実体[*substantia separata*]は[自らが]それにおいて存在することができるような最善の態勢にある¹⁴。すなわち、分離実体の各々は能

動者や目的として天体を動かすというわけである。ところで、こうしたことは、分離実体が天体と何らかの仕方で合一したのでなければ、なかったであろう。それゆえ、非物的実体は天体と合一している。かくして、天体は魂化されていると思われる。

十一. さらには、註解者 [アヴェロエス] は同書で天体は魂化されていると明確に言う¹⁵。

十二. さらには、何ものも自分の種の外には能動しない。というのも、結果は自分の原因よりも力のあるものではありえないからである。ところで、生きている実体は生きていない実体よりも善であり、それはアウグスティヌスが『真の宗教について』という書物で言う通りである¹⁶。それゆえ、腐敗から生成される動物においてとりわけ、天体は生命を原因するのだから、天体は生きており魂化されていると思われる¹⁷。

十三. さらには、註解者 [アヴェロエス] が『天球の実体について』という書物で言うように、円環運動は魂に固有である¹⁸。それゆえ、円環的に動かされることがそれにとって本性的であるような物体は、最大限に魂化されていると思われる。ところで、そのような物体とは天体である。それゆえ、天体は魂化されている。

十四. さらには、讚美すること、物語ること、歓喜することは魂化され認識を行う事物にのみ適合する。しかるに、上述のことは、『詩編』の「天の天よ、彼を讚美せよ」¹⁹や「天は神の栄光を物語る」²⁰と『ヨハネの黙示録』第十八章²¹の「天よ、それに歓喜せよ」²²によれば、聖書では天に帰属される。それゆえ、天は魂化されている²³。

【反対異論】

しかし以上に反対する。

一. ダマスケヌスは [『正統信仰論』の] 第二巻で、「天や星が魂化されているとは誰も考えない。というのも、それらは魂化されておらず無感覚だからである」と言う²⁴。

二. さらには、身体と合一した魂が身体から分離されるのはただ死を通じてのみである。しかるに、天体が死すべきものであるということとはありえない。というのも、天体は不可滅的だからである。それゆえ、もし何らかの靈的実体が魂として天体と合一するとすれば、その靈的実体は永続的に天体に繋がれていた。[だが] 何ら

かの天使が何らかの物体に永続的に割りあてられるというのは不適合なことと思われる。

三. さらには、天にある至福者の社会は天使と[人間の]魂から成る。しかるに、もし天が魂化されていれば、天の魂は[天使と人間の魂の]いずれの部分にも含まれない。それゆえ、何らかの理性的被造物が、至福を分有するものたりえないようなものであったことになるであろう。これは不適合なことであると思われる。

四. さらには、すべての理性的被造物は、自分の本性に即して考察される限りでは、罪を犯すことができる。したがって、もし何らかの理性的被造物が天体と合一してあれば、その内の何らかのものが罪を犯すことを何も妨げなかった。かくして、天体の内の何らかのものが悪霊によって動かされるということが帰結したであろう。これは馬鹿げたことと思われる。

五. さらには、われわれは善き霊の賛同を懇願しなければならない。したがって、もし何らかの霊が天体と合一してあれば、その霊を悪として措定することは不適合なことであってその霊を善として措定しなければならない——その霊は物的本性の統御において神に奉仕するがゆえに——のだから、その霊の賛同が懇願されるべきことが帰結するはずであろう。ところで、もし誰かが「太陽」または「月よ、私のために祈れ」と言うとするならば、それは馬鹿げたことと思われる。それゆえ、何らかの霊が天体と合一しているということが措定されるべきではない。

六. さらには、哲学者[アリストテレス]の『魂について』によれば、魂は[自らが]合一する身体を含む。したがって、もし天体が魂化されていれば、何らかの被造の霊的実体が天全体を含むということが帰結するだろう。これは馬鹿げたことである。というのも、こうしたことはただ、自分の位格[persona]に基づいて『シラ書』第二十四章では「私はたった一人で天の軌道を巡り歩いた」²⁵と言われるような非被造の知恵にのみ属するからである。

【主文】

解答. 以下のように言われるべきである。この問題をめぐっては、教会博士の間だけでなく古代の哲学者の間でも、相異なる見解が存在した²⁶。さて、アナクサゴラス²⁷は、天体は魂化されていないと考えたがために、アテナイ人たちによって殺された。というのも、「太陽は燃やされた石である」と彼は言ったからである。それに対して、プラトン²⁸やアリストテレス²⁹および彼らの追従者たちは、天体は魂化

されていると措定した。同様にして、教会博士の間ではオリゲネス³⁰が天体は魂化されていると措定した。彼に追従したのがヒエロニムスであり、それは『コレヘトの言葉』第一章の「靈が全体を巡りながら周囲を巡り続ける」³¹に対する或る註釈で明らかなる通りである³²。それに対して、ダマスケヌス³³は、天体は魂化されていないと断言したのであり、それは導入された権威〔第一反対異論〕において明らかなる通りである。それに対して、アウグスティヌスは『「創世記」逐語註解』第二巻³⁴および『エンキリディオン』³⁵において疑いのままに残している³⁶。

さて、両方の見解とも蓋然性の論理を持つ³⁷。というのも、諸事物の類において生物はすべての非生物よりも優先されるのだから、天体の必然性についての考察は天体が魂化されていると措定することへと導く³⁸が、靈的実体の高貴性についての考察はわれわれを反対のことへと導くからである。その理由は次の通り：より上位の靈的実体が持つことのできる魂の業の一部とは、知性に属するようなものだけである。なぜなら、〔知性作用以外の〕他の生命作用は可滅的で変成しうる身体の形相である限りでの魂の活動だからである。というのも、そうした生命作用は或る種の変成ないし物的変容とともにあるからである。また、より上位の諸実体の知性は、われわれの知性のように可感的なものから認識を受け取るといったことを要するとは思われない。それゆえ、もし身体器官を要さないものである知解することや意志すること以外の生命作用のいずれもがより上位の諸実体にはないのであれば、それら実体の尊厳〔*dignitas*〕は身体への合一を超出すると思われる。〔以上がその理由である〕。ところで、こうした二つの考察の内の第二の方が第一の方よりも有効であると思われる。というのも、身体と魂の合一は身体の故に、すなわち身体が高貴にされるために存在するのではなくて、上述のように³⁹、自分の完全性のために身体を要する魂の故に存在するからである⁴⁰。ところで、もし誰かがより奥深く考察するとすれば、おそらくその者はこうした二つの見解において全く不和を見出さないかあるいは僅かな不和だけを見出すことだろう。そのことは以下のように了解されるべきである。実際、上方への運動が火の形相に随伴する⁴¹ようにして天体の運動が何らかの物的形相に随伴するとは言われえない。その理由は次の通り：或る一つの自然的形相が傾くのは或る一つのものに対してだけであるということは明白である。ところで、運動の論理は一性に背反する。なぜなら、運動の論理には何かは今と以前とでは別の仕方では存するということが属すからである。それゆえ、自然的形相が運動に傾くのは運動そのものの故ではなくて、そこに辿りつくると運動が静止

するような何らかの在り処において存在することの故であるからして、もし天の運動が何らかの自然的形相に随伴するとしたならば、こうしたことが天の運動において生じることになってしまうであろう。[以上がその理由である。]したがって、天の運動は何らかの知解する実体によるのでなければならぬ。というのは、この運動の目的は或る抽象的で可知的な善以外のものではありえないからである。それは、天を動かす知解する実体が動かすということの故であり、すなわちその結果として、その実体は作用することにおいてその善の類似性を獲得し、そしてその可知的な善に潜在的に含まれるものが現実態において展開されることになり、特に、それらの故に他のすべてのものが存在すると思われるような選ばれし人々の数の成就〔completio〕がそうである⁴²。

そのようなわけで、靈的諸実体には二通りの秩序があることになるだろう。それら実体の内の或るものは天体の動原であることになるだろうし、動原が可動的なものに対するようにして天体と合一するのであり、それはアウグスティヌスも『三位一体論』第三巻で「すべての物体は生命の理性的靈を通じて神から支配される」と言う⁴³のと同様であり、また同じことがグレゴリウスの『対話』第四巻によって認められる⁴⁴。それに対して、全くもって抽象的で物体と合一しないような或るものはこうした運動の目的になるだろうが、それに対して他のものは、それによって動原が可動的なものと同様で合一するような仕方を通じて天体と合一するのであり、こうしたことはプラトンやアリストテレスの意図を救済するのに充分であると思われる。そしてプラトンについては、そのことはたしかに明白である。というのも、上述のように⁴⁵、プラトンは魂が動原として身体と合一する限り以外の仕方では、人間の身体さえも魂化されないと述べていたからである⁴⁶。それに対して、アリストテレスの言明からは、アリストテレスは魂の諸々の力について天体においては知性を司る力以外のものを措定しなかったことが明白である⁴⁷のに対して、知性は自身に即してはいかなる身体の実態でもない⁴⁸。ところで、魂を通じて栄養摂取し感覚を付与されるようなより下位の諸物体のような仕方では天体は魂化されているのだとさらに言うことは、天体の不可滅性に背反する。そのようなわけで、そのようなより下位の諸物体が魂化されるような仕方では天体が魂化されているということは否定されるべきである。しかしながら、もし魂化〔animatio〕ということで動原の可動的なものに対する合一以外の何ものも了解されないとすれば、天体が魂化されているということは否定されるべきではない⁴⁹。そして以上のような二つの仕方にアウグス

ティヌスは『「創世記」逐語註解』第二卷〔第十八章第三十八節〕で触れていると思われる。すなわち、「天のそうした星は鮮やかな物体であるだけであるのか、それとも自分の支配者として或る靈を持つのか、もし持つのであれば、肉が動物の魂を通じてそうであるのと同様に、その靈からまた生命的に靈注されるのか否かということが問われるのが常である」と彼は言う⁵⁰。しかし、後続するところを通じて明らかのように、アウグスティヌスは両者を疑いのままに残してはいるが、前述のことに即せば、天のそうした星は支配者として靈を持つということが言われるべきである。ただし、より下位の動物が自分の魂からそうであるのと同じ仕方では天の星はその靈から魂化されるのではない。

【異論解答】

それゆえ、

一．第一に対しては以下のことが言われるべきである。天体が靈的実体に達するのは、靈的実体のより下位の秩序が動原のあり方を通じて天体と合一する限りでのことである。

二．第二に対しては以下のことが言われるべきである。アヴェロエスの見解に即せば、より下位のものどもにおける動物と同様に、天は質料と形相からなる複合体である⁵¹。しかしそれでも、質料は両方の側で異義的に言われる。すなわち、より上位の物体には、より下位の物体と同様に存在に対する可能態があるのではなくて、在り処に対する可能態があるのみである。それゆえ、現実的に存在する物体自身が質料であり、現実的な有であるがゆえにその物体はその質料に存在を与える形相は要さないが、その質料に運動を与えるような形相だけは要する。そしてその場合に、天体は人間の身体より高貴な形相を持つが、それは別の仕方によってである。ところで、もし他の人々が言うのと同様にして、天体自身が質料と物的形相からなる複合体であると言われるとすれば、その場合には、その物的形相は形相であり現実態である限りで最も高貴であることになるだろうということが依然として言われるだろう。なぜなら、その物的形相は質料の可能態性全体を満たすからであり、その結果としてその質料には他の形相に対する可能態性が残存しなくなる。

三．そして以上のことを通じて第三に対する解答もまた明らかである。

四．第四に対しては以下のように言われるべきである。靈的実体によって動かされるということに基づけば、他の仕方ではなしに、天体が動原としての靈的実体に

対する傾向性を持つということが帰結する。

五一六. 第五および第六に対しても同様な仕方と言われるべきである。

七. 第七に対しては以下のように言われるべきである。天を動かす霊的実体はそのような物体の運動に対する規定された自然的力を持ち、同様にして天の物体もそのような運動によって動かされるための自然的適性〔*naturalis aptitudo*〕を持つ。そしてこのようにして天の運動は、知解する実体によるものではあるが、自然的なものなのである⁵²。

八. 第八に対しては以下のように言われるべきである。意志の命令で霊的実体が天体を動かすということは蓋然的に言われる。その理由は以下の通りである。物体的質料が形相的変成に即して意のままに従うのは被造的霊に対してではなくてただ神に対してのみであり、それはアウグスティヌスが『三位一体論』第三巻で言う通りである⁵³。しかしながら、場所的変成に即せば被造的霊に対して意のままに従いようであろうということがわれわれにおいてさえも窺えるのであり、そのわれわれにあっては意志の命令に対して直ちに身体の四肢の運動が付き従う。しかしながら、もし意志の命令に対して力の流入がまた付加されるとするならば、このことの故に疲労が力の有限性に基つて帰結するわけではない。その理由は次の通り：より上位の秩序の任意の力は、それ自体でかつ自分よりも上位のものの観点からは有限ではあるが、それでも自分よりも下位のものの観点からは無限である⁵⁴。例えば、たとえ産出が無限に至ったとしても、その産出を通じて太陽の力が小さくされなかったであろうような生成消滅しうものもの観点からは、太陽の力も無限である。同様に知性の力も可感的形相の観点からは無限である。かくして、天を動かす霊的実体の力も物体的運動の観点からは無限である。それゆえ、霊的実体において疲労があることは帰結しない。〔以上がその理由である。〕

九. 第九に対しては以下のように言われるべきである。可滅的動物を動かす魂は存在するというに即してその動物と合一するが、天体を動かす霊的実体は動かされるというに即してのみその天体と合一する。それゆえ、附帯的に動かされるとということが可滅的動物の魂に帰属されるのはその魂自身の論理によってである。というのも、その魂が存在するというに即してはそれと共に一であるような身体が動かされると魂自身も附帯的に動かされなければならないからである。しかるに、附帯的に動かされるとということがより下位の天球の動原に帰属されるのは、動原自身の論理によってではなくて可動的なものの論理によって、すなわち、より

上位の天球の運動で運ばれたものとしてより下位の天球が附帯的に動かされる限りでのことである。それに対して、より上位の天球の動原はいずれの仕方によっても附帯的には動かされない。なぜなら、その動原の天球は運ばれるのではなくて他の天球を運ぶからである。

十. 第十に対しては以下のように言われるべきである。こうしたことに対してアヴェロエスが様々に語っていることが見出される。すなわち、『天球の実体について』という書物では、能動者として天体を動かすものと目的として動かすものは同じであると彼は言っていたが⁵⁵、こうしたことは実際には、特に彼の見解に即せば甚だしく誤っている。その見解では、第一原因は第一の天を動かす実体を超えていないということを彼は措定している。というのも、その場合には、能動者として第一の天を動かす実体とその天の魂であると言われることに即せば、神は第一の天の魂であるだろうということが帰結するからである。そしてこうしたことを彼が言った論理は甚だしく不十分である。その理由は次の通り：質料から分離された実体にあっては知解するものと知解されるものは同じであるのだから、欲求するものと欲求されるものは同じであると彼は考えたのだが⁵⁶、後者は〔前者に〕類似したことではない。というのは、任意の事物についての認識が生じるのは認識されるものが認識するものにおいてあるということに即してである一方、欲求が生じるのは欲求するものの欲求される事物に対する転化〔*conversio*〕に即してだからである。ところで、もし欲求される善が自分自身に基づいて欲求するものに内在するとしたならば、欲求される善に随伴するために〔欲求の基体を〕動かすということが欲求される善に相応しくなかったことであろう。それゆえ、目的として〔欲求の基体を〕動かすような欲求される善は、能動者として〔欲求の基体を〕動かすような欲求するものとは別であると言わなければならない。そしてこうしたことと同じことをアヴェロエスは〔アリストテレスの〕『形而上学』第十一巻の註解で言う。すなわち、そこで彼は二つの動原を措定する。一方は彼が魂と呼ぶ結合体であり、もう一方は目的として動かすような分離体である⁵⁷。しかしながら、こうしたこと全体に基づいても、靈的実体が動原として天体と合一するということが認められるわけではない。

十一. 第十一に対しては以下のように言われるべきである。天体が魂化されているとアヴェロエスが言うのは、靈的実体が動原として天体と合一するからであって、形相として合一するからではない⁵⁸。それゆえ、〔アリストテレスの〕『形而上学』

第七巻に対して、種子の形成力は種子の内にある熱を通じてでなければ能動しないとアヴェロエスは言っているが、それは、魂が自然熱においてあるのと同様に形相が種子においてあるという限りでのことではなくて、魂が天体に内包されているのと同様に形相が種子に内包されている限りでのことである⁵⁹。

十二. 第十二に対しては以下のように言われるべきである。天体は靈的実体によって動かされる限りにおいて靈的実体の道具であり、そのような限りでは、鋸が技術の力において箱を原因することへと能動するのと同様に、天体は靈的実体の力において自らよりも下位のものにおいて生命を原因することへと動かす⁶⁰。

十三. 第十三に対しては以下のように言われるべきである。当該の論理からは、天体が靈的実体によって動かされるということ以上のことが認められえない。

十四. 第十四に対しては以下のように言われるべきである。ダマスケヌスに即せば⁶¹、天が神の栄光を物語ったり、讚美したり歓喜したりすると質料的な仕方と言われるのは、天が人間にとって讚美することや物語ることや歓喜することの質料である限りでのことである。というのも、類似のことが聖書では山や丘や他の魂化されていない被造物について見出されるからである⁶²。

【反対異論解答】

それに対して、反対異論の内、

一. 第一に対しては以下のように言われるべきである。天体が魂化されていることをダマスケヌスが除外するのは、靈的実体が可滅的動物に対するようにして形相として天体と合一するという場合のことである⁶³。

二. 第二に対しては以下のように言われるべきである。一人の人間の保護のためにその人間が生きている間は一なる天使が割りあてられる。それゆえ、天体を動かすために天体が動かされている間は一なる天使が割りあてられるのであれば不適合なことはない。

三. 第三に対しては以下のように言われるべきである。もし天体が魂化されていれば、天体を監督する靈が天使の社会に算入される。それゆえ、アウグスティヌスは『エンキリディオン』で「太陽や月や全部の星が天使の社会に属すのかどうかについては確かなことはわからない。ただしそれらは、感覚や知解を伴わない光体であるとなりの人々には思われている」と言う⁶⁴。

四. 第四に対しては以下のように言われるべきである。こうしたことにおいては、

罪を犯した天使が可滅的物体よりも優先されるような天使の数の内にあるものであったと措定するダマスケヌスの見解にわれわれが追従するとすれば、いかなる疑いもない⁶⁵。それに対して、もしグレゴリウスの考えに即してより上位の天使の内の何らかの者たちが罪を犯したならば⁶⁶、こうした任務に割りあてた天使たちを、他の多くの天使たちに対してと同様に神は墮落から保護したのだと言われるべきである。

五. 第五に対しては以下のように言われるべきである。「太陽よ、私のために祈れ」とわれわれは言わない。なぜなら、靈的実体は形相としてではなくて動原として天の物体と合一するからであり、またそれは、偶像崇拜の機会が除去されるためでもあるからである。

六. 第六に対しては以下のように言われるべきである。哲学者〔アリストテレス〕の『自然学』第八巻⁶⁷によれば、天の動原は、天の何らかの部分にあって全体においては無いのであるからして、天の軌道を巡り歩かない⁶⁸。他方で、全体と部分に即して身体に存在を与える魂については別様である。

¹ 平行箇所：『ロンバルドゥス「命題集」註解』第2巻第14区分第1問題第3項；『定期討論集 真理について』第5問題第9項第14異論解答；『対異教徒大全』第2巻第70章；第3巻第23章；第24章；『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項；『神学綱要』第1部第171章；『定期討論集 魂について』第8問題；『神学大全』第1部第70問題第3項；『アリストテレス「天地論」註解』第2巻第2章第3講；第8章第13講；『四十三項目についての総長ヨハネス・ヴェルチェリへの解答』第1～18項；『三十六項目についてのヴェネツィアの講師への解答』第1項；第3項；『第十二任意討論集』第5問題第2項。

² Cf. 偽ディオニュシオス『神名論』第7章第3節（PG 3, 872B）「神の知恵は、常に第一次的存在者の最後のものを第二次的存在者の最初のものとして結合し、万物をただ一つの協調と調和にあるものとして美しくつくりあげるのである」（キリスト教神秘主義著作集 1, p.226）。

³ 同様の異論は次の箇所にもある：『神学大全』第1部第70問題第3項第2異論（L.5, p.179ab）「より高貴な物体には、より高貴な形相が属している。然るに、太陽や月やその他諸々の光体は植物体や動物体よりも高貴な物体であり、従って、より高貴な形相を持つものでなくてはならぬ。ところで、最も高貴なる形相は生命の根源たる魂にほかならない。まことに、アウグスティヌスが『真の宗教について』のなかでいうごとく、『生ける実体は、およそそれが如何なるものであっても、生命なき実体よりも、自然の秩序において優位にある』のである。かくして、天の諸々の光体は魂あるものたるのではなくてはならぬ」（神学大全 5, p.100）。

⁴ Cf. アリストテレス『天について』第2巻第12章 292b17-19「あらゆるものにとって、かの目的に達することが断然最善なのであるが、達しない場合にはいつでも、最善のあり方に近ければ近いほど善い」（アリストテレス全集新 5, p.118）；トマス『アリストテレス「天地論」註解』第2巻第12章（第18講）第7節（L.3, p.194a）「そしてこうしたことの理由を指定するに際して、アリストテレスは次のように言う。いかなる仕方によってであれ、すなわち運動がなくても、あるいは僅かな運動を通じても、あるいはたくさんの運動を通じても、目的に達することが最大限に最善なのである、と。それに対して、もし目的を達成するということが起こらないとすれば、最善のことに接近すればするほど、それだけ何かがより善くなるだろう」。

⁵ G&S (p.191) に従って、《quiescet》を《quiescit》と読み替える。

⁶ Cf. アリストテレス『天について』第2巻第3章 286a17-18「自然本性に反したものは何一つ永続的ではない」(アリストテレス全集新5, p.90); トマス『アリストテレス「天地論」註解』第2巻第3章(第4講)第6節(L.3, p.137a)「そして以上のことから、天の運動は永久のものではありえないということが帰結する。なぜなら、そうでありうるのは何か静止したものが中心にある場合だけであるし、またもし中心にあるものの静止が強制されたものであるとすれば、それは永久のものではありえないということが帰結するであろう。かくして、その運動もまた永久のものではないことになるであろう。というのも、本性の外にあるものは何も永久のものではないからである。[略]それゆえ、強制されたものが永久のものであるということは不可能であることが明らかである」。

⁷ 「自体的にあるものは他のものを通じてあるものよりも常に先なるものである」(quod est per se semper est prius eo quod est per aliud) という類の言説はアリストテレスに由来する。Cf. アリストテレス『自然学』第8巻第5章 257a30-31「それ自体として原因であるものは、それ自身も原因ではあるが他のものによってそうであるものよりも、原因として常により先である」(アリストテレス全集旧3, p.323)。トマスがこのような言説を用いている箇所は次の通り:『対異教徒大全』第1巻第13章;第2巻第70章;第3巻第46章;『神学大全』第1部第20問題第1項主文;第50問題第6項第2異論;第70問題第3項第5異論;第2-1部第35問題第6項主文;第2-2部第23問題第6項主文;第26問題第12項第1異論解答;第27問題第6項第1異論解答;第34問題第2項主文;第3項主文;第44問題第1項主文;第162問題第6項主文;第3部第19問題第3項主文;第36問題第4項第1異論;『アリストテレス「自然学」註解』第8巻第5章(第9講)第13節。

⁸ Cf. アリストテレス『自然学』第8巻第5章 257b12-13「それゆえ、それ自身を動かすものは〔とにかく何らかの仕方で〕その或る部分が動かし、他の部分が動かされるのである」(アリストテレス全集旧3, p.324)。

⁹ 同様の異論は次の箇所にもある:『神学大全』第1部第70問題第3項第5異論(L.5, p.180a)「第一の可動的なるものは天である。然るに、「可動的なるもの・動かされるもの」の類において、その第一なるものは、『自然学』第八巻に証明されているごとく、自己自身を動かすところのものにほかならない。けだし、『自らによるところのものは、他者によるところのものに先立つ』のだからである。然るに、やはり同巻において示されているごとく、ひとり魂を持つもののみが自己自身を動かす。それゆえ、諸々の天体は魂を持つものたるのでなくてはならぬ」(神学大全5, pp.100-101)。

¹⁰ Cf. アウグスティヌス『三位一体論』第3巻第4章第9節(PL42, 873)「いやしく弱い物体は精妙で力ある物体によって、ふさわしい秩序の中で支配されるように、すべての物体は生命の霊によって、また非理性的な生命の霊は理性的な生命の霊によって支配される」(アウグスティヌス著作集28, p.103); トマス『神学大全』第1部第70問題第3項主文(L.5, p.180b)「アウグスティヌスもやはり、『三位一体論』第三巻において、『如何なる物体も、すべて生命の霊を通じて(神により宰領される)』というのである」(神学大全5, p.104);『四十三項目についての総長ヨハネス・ヴェルチェリへの解答』第3項(L.42, p.328, ll.108-110)「アウグスティヌスは『三位一体論』第3巻で「より粗雑で下位の物体は、何かしらの秩序によって、より精妙で上位の物体を通じて支配される」と言う」;『三十六項目についてのヴェネツィアの講師への解答』第1項(L.42, p.339, ll.14-17)「アウグスティヌスは『三位一体論』第3巻で「より粗雑で下位の物体は、何かしらの秩序によって、より精妙で上位の物体を通じて支配される。そのようにしてすべての物体は生命の理性的霊を通じて支配される」と言う」。

¹¹ 「天の運動は本性的である」(motus celi est naturalis) という類の言説はアリストテレスに由来する。Cf. アリストテレス『自然学』第2巻第1章 192b21-23「或るものの「自然」とは、これ〔自然〕がその或るものうちに第一義的に・それ自体において・そして付帯的ではなくして・内属しているところのその或るものの運動しまたは静止することの原理であり原因である」(アリストテレス全集旧3, p.45);『天について』第1巻第2章 268b14-16「すべての自然的な物体と大きさはそれら自身によって場所的な動きをもつとわれわれは言う。われわれの主張では自然がそれらにとっての動きの始原だからである」(アリストテレス全集新5, p.18)。トマスが

このような言説を用いている箇所は次の通り：『ロンバルドゥス「命題集」註解』第2巻第14区分第1問題第3項第1異論；『対異教徒大全』第2巻第30章；『神学大全』第1部第70問題第3項第4異論；第4異論解答；第5異論解答；第2-1部第6問題第5項第2異論解答；『アリストテレス「天地論」註解』第1巻第2章（第3講）第3節。

また、ここの第7異論と同様の異論は次の箇所にもある：『ロンバルドゥス「命題集」註解』第2巻第14区分第1問題第3項第1異論（SS2, p.351）「天の運動は自然的運動であり、それは『天地論』第一巻で哲学者〔アリストテレス〕が言う通りである。しかるに、自然的運動は、物体の自然的形相がその原理である。それゆえ、天の運動はその自然的形相によるものであって、〔知性的な〕把握を通じた何らかの動かすもの〔知性体〕によるものではないと思われる」。

¹² Cf. アリストテレス『天について』第2巻第1章 284a16-17「そのような強制的必然を必要とするものはすべて、それが永続的であればあるほど、労苦多きものであり、最善の状態から外れている」（アリストテレス全集新5, p.83）；トマス『アリストテレス「天地論」註解』第2巻第1章（第1講）第7節（L.3, p.122ab）「そのようなもの、すなわち自分の本性に反して何らかの運動によって動かされるものはすべて、その運動が連続的で永久であればあるほど、また最善の、すなわち自分の本性に即したものであるような態勢から外れていなければいられないほど、それだけ一層労苦多きものである」。

¹³ Cf. アリストテレス『自然学』第8巻第6章 259b28-31「しかし、〔さきに靈魂の場合にみたように〕付帯的にそれ自身によって動かされるということと、付帯的に異なるものによって動かされるということとは同じではない。前者は消滅的なものどもにのみぞくするけれども、付帯的に異なるものによって動かされるということは、天界にあるものどものうちでいくつかの移動をおこなうかぎりのものども〔複雑な軌道を運行する太陽、月、遊星〕を動かすところの若干の諸原理〔おそらく理性〕にさえもぞくしている〔こうした諸原理は連続的な運動をひきおこすことが可能である〕；トマス『アリストテレス「自然学」註解』第8巻第6章（第13講）第6節（L.2, pp.413b-414a）「アリストテレスの立場によれば、より下位の天球、例えば太陽や月や他の惑星などの運動は永久であるものの、それらの動原は附帯的な仕方で動かされると思われる。〔略〕したがって、惑星の天球の動原には、その動原が附帯的な仕方で動かされるという意味ではなくて、その動原によって動かされる——より上位の天球の運動から運ばれる——天球が附帯的な仕方で動かされるという意味で、附帯的な仕方で動かされるということが帰属されうる」。

¹⁴ Cf. アヴェロエス『アリストテレス「形而上学」大註解』第11巻第48註解（Venetiis, 1562, t.8, f.332vL-M）。

¹⁵ Cf. 同第25註解（f.310rB-C）。

¹⁶ Cf. アウグスティヌス『真の宗教について』第29章第52節（PL 34, 145）「いかなる生命ある実体も自然の法則によって、いかなる生命のない実体よりもまさっている」（アウグスティヌス著作集2, p.337）。註3も参照。

¹⁷ 同様の異論は次の箇所にもある：『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項第10異論（DP, pp.172b-173a）「さらには、何ものも自分の種を超えて能動しない。しかるに、天体はより下位のものにおいて生命を原因するのであり、それは天体の力を通じて腐敗から生成される動物において明らかな通りである。それゆえ、アウグスティヌスが言うように生きている実体は生きていない実体よりも高貴であるのだから、天体は生命を持つと思われるのであり、そのようなわけでまた自分と本性的に合一した霊的実体を持つと思われる。かくして前述と同じである」。

¹⁸ Cf. アヴェロエス『天球の実体について』第2章（Venetiis, 1562, t.9, f.6rB）。

¹⁹ Cf. 新共同訳「天の天よ／天の上にある水よ 主を賛美せよ」（第148編第4節）。

²⁰ Cf. 新共同訳「天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す」（第19編第2節）。

²¹ G&S（p.192）に従って、《XIV》を《XVIII》と読み替える。

²² Cf. 新共同訳「天よ、この都のゆえに喜べ」（第18章第20節）。

²³ Cf. トマス『定期討論集 魂について』第8問題第19異論（L.24.1, p.66, ll.158-161）「さらには、物語ることは知解する実体の行為である。しかるに、「天は神の栄光を物語る」のであり、それは『詩編』で言われる通りである。それゆえ、天は知解するものである。それゆえ、それは

知性的魂を持つ」；第19 異論解答 (p.74, ll.527-536) 「第十九に対しては次のように言われるべきである。その証明は、ラビ・モーゼス [・マイモニデス] がそれを指定してはいるものの、取るに足らぬものである。なぜなら、もし「天が神の栄光を物語る」ということが言われる際に、物語ることが固有に解されるならば、天は知性だけではなくて舌も持つのでなければならない。というのも、天が神の栄光を物語ると言われるのが、もしそれが文字通りに解釈されるとするならば、その天から人間に神の栄光が明らかにされる限りでのことだからであり、そのような仕方によっては感覚能力のないものさえも神を賛美すると言われるのだからである」。

²⁴ Cf. ダマスケヌス『正統信仰論』第2巻第6章 (PG 94, 885A)。

²⁵ Cf. 新共同訳「ひとりでわたしは天空を巡り歩き、地下の海の深みを歩き回った」(第24章第5節)。

²⁶ 註36を見よ。

²⁷ Cf. アウグスティヌス『神の国について』第18巻第41章第2節 (PL41, 601) 「どうしてアナクサゴラスは、太陽は赤熱した石であると言って、神であることを否定したために犯罪者にされてしまったのか、不思議である」(アウグスティヌス著作集14, p.351)；ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第2巻 (Long, p.60)。また註36も見よ。

²⁸ Cf. プラトン『ティマイオス』38E；39E-40B；アウグスティヌス『神の国について』第13巻第16章第2節 (PL41, 388) 「これと別の問題は、プラトンが星について語ったことが真実であるかどうかについてである。というのも、昼あるいは夜に物理的な光でもって大地を照らす大きな光の塊や小さな光の塊が自らの持つ霊魂によって生きているとか、それらの霊魂は知性的で至福なものであるといった考えを認めてやらなければならぬ理由はないからである。彼はまた、宇宙全体についても同様のことを述べ、宇宙は最大の一箇の生きもので、その中にすべての生きものが含まれていると断言している」(アウグスティヌス著作集13, p.182)；マクロビウス『「スキピオの夢」註解』第1巻第14章第17-19節 (Willis, p.58, ll.20-28)；ポエティウス『ポルピュリオス「イサゴーゲー」註解』第2版第2巻第5章 (PL64, 93A)；第3巻第4章 (103A-B)；第4巻第6章 (123B)；第7章 (124B)。

²⁹ Cf. アリストテレス『天について』第2巻第2章 285a29-30 「天が生きていて動きの始原をもつ」(アリストテレス全集新5, p.87)；第12章 292a18-21 「いや、われわれは星々についてそれらをたんに物体として、すなわち相互の秩序はもってはいないが、生命は全然もっていない物質単位として考えているのだが、しかしそれらは行為と生命を分けもつものと見なさなければならないのである」(p.116)；トマス『アリストテレス「天地論」註解』第2巻第2章(第3講)第2節 (L.3, p.130a) 「ところで、天は魂化されていて、運動の原理を持つ。さて、天が魂化されているということをアリストテレスは、『自然学』第八巻で証明されていることに基づいて前提する」；第12章(第18講)第1節 (191a) 「第一の問題が困難だと思われるのは、あたかも、魂化されているということを抜きにして天体が何らかの秩序を持つ単なる物体であるかのようにして、われわれは天体について探求するからである。[略]しかし、前述の疑いが解消されるためには、天体は何であれ生命だけではなくて活動をも分有するという見解を天体について持つのでなければならない。こうしたことは、理性的魂を持つものに固有なことである」；『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第11章 (L.45.1, p.254, ll.113-115) 「魂化されているとアリストテレスが指定する天体は、魂の諸部分の内に知性を持つ」；『アリストテレス「形而上学」註解』第12巻第4講 (EMA, p.580b) 「実体の類における第一の諸原理は、天体は魂化されていると指定するアリストテレスの見解に即せば、魂化された生きている実体である」；第7講 (p.592ab)。

³⁰ Cf. オリゲネス『諸原理について』第1巻第7章 (PG 11, 173A) 「というのは惑星と呼ばれる星の軌道と、ἀπλανείς(恒星)と呼ばれる星の軌道は異なっているからである。このことは、魂なしにいかなる物体も運動をなし得ず、魂を持っている者は、片時たりとも、運動しないことがあり得ないことを明確に示している」(諸原理について, p.107)。

³¹ Cf. 新共同訳「風は南に向かい北へ巡り、めぐり巡って吹き／風はただ巡りつつ、吹き続ける」(第1章第6節)。

³² Cf. ヒエロニムス『「コレヘトの言葉」註解』第1巻第6節 (PL23, 1068C-1069A)；アルクイヌス『「コレヘトの言葉」註解』第1巻第6節 (PL100, 672C)。

³³ 註 24 を見よ。

³⁴ Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第 2 巻第 18 章第 38 節 (PL 34, 279-280) 「またよく次のように問われる。すなわち、天の光体は単に物体なのか、それともある種の導き手として自らの靈を持つのか、そして持つとすれば、その靈によって生命を吹きこまれて生かされているのか、ちょうど生きものの魂によってその肉体が生かされているように。それともそうした靈と物体との混淆なしに、ただその導き手としての靈が現臨することによって生かされているのかと。こうした問題は容易に理解しうることではない。しかしこの聖書注解の過程で、よりふさわしい場所に至るであろうと思う。そこでこうした事柄に関して、聖なる権威の基準に従って、たとえ確かなことではないとしても、信ずるに足ることを示しうらうと思う。しかし今は、敬虔な信仰がきわめて重要であることを思い、慎しみを守って、あいまいな事柄に関して、軽率に信ずることのないようにしなければならない。それは、あとで真理によって明らかに示されたことが、たとえ旧約また新約聖書に反することはありえないとしても、われわれの誤りに執着しようとする気持の故に、憎しみの対象となるというようなことにならないためである」(アウグスティヌス著作集 16, p.68)。

³⁵ Cf. アウグスティヌス『エンキリディオン』第 15 章第 58 節 (PL 40, 260) 「答えることのできる人々は、答えてもらいたい。ただし答えの内容を証明できるならばである。わたし自身はこういうことがわからないことを告白する。また、太陽や月やすべての星は、ある人々には、感覚も知性も持っていない光輝く物体だと思われる。しかし、それにもかかわらず、これらのものがあの天の社会に所属するか否かについては、わたし自身確かなことは知らない」(アウグスティヌス著作集 4, p.259)。

³⁶ Cf. トマス『神学大全』第 1 部第 70 問題第 3 項主文 (L.5, p.180a) 「この問題をめぐって哲学者たちの間に互いに異なった見解が存した。アナクサゴラスは、すなわち、アウグスティヌスの『神国論』第十八巻における叙述にしたがえば、『アテナイ人のあいだで告発されたのであるが、それは彼が、太陽は灼熱する石であると説き、それが神だということを(乃至は魂あるものなることを) すっかり否定し去ったからであった。』プラトン学派のひとびとは、これに反して、天体をもって魂あるものとなしたのである——。同様に、信仰の諸学匠の間にあっても、この点をめぐって、やはりさまざまな見解が存した。オリゲネスは、すなわち、諸々の天体は魂あるものであるとなした。ヒエロニムスもやはり、『伝道の書』第一章(第六節)の、『靈は宇宙を巡りつつ進む』なることばを解釈するにあたって同様の考えを示しているように思われる。他方では、然し、バシリウスやダマスケヌスは天体は魂あるものではないと断じている。アウグスティヌスは、これに対して、こうしたいずれの側にも傾くことなく、問題を疑問のままに残したのであり、このことは『創世記逐語註解』第二巻ならびに『提要』において明らかに知られるごとくであって、この後者において彼は、もし天体が魂あるものだとするならばその魂は天使の仲間に入するものであろう、とも語っている」(神学大全 5, pp.101-102)；『定期討論集 神の能力について』第 6 問題第 6 項主文 (DP, p.175b)；『定期討論集 魂について』第 8 問題第 3 異論解答 (L.24.1, pp.70-71, ll.342-364) 「第三に対しては次のように言われるべきである。天体の魂化 [animatio] については哲学者の下でも信仰の博士の下でも相異なる見解が存在する。すなわち、哲学者の下ではアナクサゴラスが、すべてを支配する知性は全くもって混合されても分離されてもおらず天体は魂化されていないと措定したがために、アウグスティヌスが『神の国について』という書物で物語るように、太陽はいわば燃える石であると述べたがゆえに、死刑宣告されたと言われている。それに対して、他の哲学者たちは、天体は魂化されていると措定した。その内の或る人々は、神は天の魂であると述べ、それが偶像崇拜の論理となっていた。すなわち、天および天体に神の礼拝が帰属されたのであった。それに対して、プラトンやアリストテレスといった他の人々は、天体は魂化されていると措定しながらも、やはり神は、全くもって分離された、天の魂より上位の何かであると措定していた。信仰の博士の下でもオリゲネスや彼の追従者たちは、天体は魂化されていると措定した。それに対して、或る人々は、ダマスケヌスが措定したように天体は魂化されていないと指定したのであり、こうした立場は当代の神学者の下でもより共通のものである。アウグスティヌスは『「創世記」逐語註解』第二巻および『エンキリディオン』という書物では疑いのままに残している；『第十二任意討論集』第 5 問題第 2 項主文 (L.25.2, pp.405-406, ll.4-10) 「解答。次のように言われるべきである。この

ことについて教会博士たちは相異なる仕方では考えていた。すなわち、ヒエロニムスは『コレヘトの言葉』に対して[註解しながら]「太陽は魂化されている」と述べているが、ダマスケヌスはこれを否定する。このような差異は哲学者たちの下でも存在する。すなわち、プラトンやアリストテレスは、天体は魂化されていると措定するが、アナクサゴラスはそうではなかったがために殺されたと読み伝えられている。

³⁷ Cf. トマス『ロンバルドゥス「命題集」註解』第2巻第8区分第1問題第1項主文(SS2, p.204)「天使は天球の形相であり天球の数に即して多数化されるのだと措定する哲学者たちの誤り」;『定期討論集 真理について』第5問題第9項第14異論解答(L.22.1, p.167, ll.499-507)「他方、天体はより完全であるから、形相としてそれを完成する何らかの霊的な実体を必要とすることない。また本性によるこの完全性は人間の魂より高貴である。或る人々は天球の動者たちがそれら天球の形相として結合していると主張したとしても、それはアウグスティヌスによって『創世記逐語註解』第2巻(18章)において疑問のうちに残されている」(真理論, p.144);『対異教徒大全』第2巻第70章(L.13, p.449b, l.7 - p.450a, l.20)「それゆえアリストテレスの見解によれば、第一に動かされるもの、すなわち天は魂を持つものである。だから『天について』第2巻[2章 285a29-31]においてもはっきりと、天は魂を持っており、そのために天にはわれわれにとってだけでなくそれ自体においても位置の相違があるのでなければならぬと述べられているのである。／そこでアリストテレスの意見にそって、天はどのような魂によって魂を持つものとなっているのかを探究してみよう。[略]さて、以上で語られてきた天が魂を持つということについて、われわれはそう語ったのであるが、それをわれわれが信仰の教えにしたがって肯定しているわけではない。上記のようにであれ別の仕方においてであれ、そのようなことについて語ることは信仰の教えには属していないからである」(心身問題, pp.139-141);第90章(p.550a, ll.15-17)「同じく、生きているすべての物体は魂によって何らかの仕方でも場所的に動く。実際、天体は確かに生きたものとされているのであれば円環的に動く」(p.399);『定期討論集 魂について』第8問題第3異論解答(L.24.1, p.71, ll.364-371)「したがって、天体が何らかの少なくとも分離された知性によって動かされるということを強固に保持しながらも、議論のために両方の側を支持したうえで、何らかの知性的実体——それはたしかに単なる知性を司る能力だけを持つ一方で、感覚を司る能力は持たない——が形相として物体の完全性であるとわれわれは言おうではないか」;『第十二任意討論集』第5問題第2項主文(L.25.2, p.406, ll.11-13)「さて、私は言う。アウグスティヌスの『「創世記」逐語註解』第二巻によれば、そうであるのかあるいは別様であるのかは信仰には関係しない」;『アリストテレス「形而上学」註解』第12巻第4講(EMA, p.580b)「天体の魂は、もしそれが魂化されているとすれば、知性と意欲以外には魂の他の部分を持たない」;第8講(p.593a)「そしてたしかにこうしたことは、知解し欲求する魂によって天が魂化されるということが措定される限りでは、アリストテレスの見解に即して真である」。また註36を見よ。

³⁸ 註16を見よ。

³⁹ 次を見よ:本書第2項第5異論(L.24.2, pp.20-21, ll.34-41)「さらには、形相が質料の故に存在するのではなくて質料が形相の故に存在する。それゆえ、身体が完成されるために魂が身体と合一するのではなくて、もし魂が形相であるならば、魂の完成の故に身体が魂と合一する。しかるに、魂は自分の完全性のために身体を要しない。というのも、魂は身体がなくても存在し知解できるからである。それゆえ、魂が形相として身体と合一するのではない」(石田 2014b, p.135)を見よ。ただし引用にあたっては訳を改めた。

⁴⁰ Cf. トマス『神学大全』第1部第70問題第3項主文(L.5, p.180a)「魂と身体との合一ということは、身体のためではなくして魂のためである。形相が質料のためにあるのではなく、却ってその逆なのだからである」(神学大全 5, p.102)。

⁴¹ Cf. アリストテレス『自然学』第4巻第8章 214b12-16「さて、空虚が或る人々の主張するようにそのように離されて存在するものではないということを、もう一度われわれは説こう。すなわち、もし単純物体〔四元素〕の各ものもつ或る移動が——たとえば火の上への移動や土の下への(すなわち中心に向かつての)移動が——自然によってであるとするれば、空虚がこうした移動の原因でないであろうことは明らかである」(アリストテレス全集旧 3, pp.149-150)。

⁴² Cf. トマス『定期討論集 真理について』第6問題第3項第1異論解答(L.22.1, p.186, ll.253-

260) 「或る人は別の人の冠を受け取ると言われるが、それは他の人がその人に予定されていた冠を失ったからではなく、或る人が現在の義によって自らに相応しい冠を失うときにはいつもその人の場所に別の人が選ばれたものの数を満たすために置き換えられるのである。ちょうど、墮落した天使たちの場所に人間が置き換えられているようにである」(真理論, p.166)；『神学大全』第1部第72問題第1項第4異論解答(L.5, p.185a)「人間の場合にあっては、多数化のための或る特別な根拠が存するからであって、それは、すなわち、選ばれた者の数を満たさんため、そして、『子を生む仕事のうちにいやしくも罪があるなどとはいわせないため』なのである」(神学大全 5, p.116)。

⁴³ 註10を見よ。

⁴⁴ Cf. グレゴリウス一世『対話』第4巻第6章(PL 77, 329B)；トマス『ロンバルドゥス「命題集」註解』第2巻第14区分第1問題第3項主文(SS2, p.353)「それゆえ、グレゴリウスは『対話』第四巻第六章において、「物的被造物は霊的被造物を通じて統御される」と言う」。

⁴⁵ 次を見よ：本書第2項主文(L.24.2, pp.26-27, ll.252-257)「それゆえ、上述のグレゴリウスが言及するように、人間は魂と身体の複合体ではなくて、人間は身体を使用する魂であるとプラトンは主張した」(石田 2014b, p.143)。ただし引用にあたっては訳を改めた。

⁴⁶ Cf. アリストテレス『魂について』第2巻第1章 413a9「しかしさらに、船員の船に対する関係のような意味において魂が身体の終極実現状態なのであるかどうかは、いまだ明らかではない」(アリストテレス全集新7, p.68)；トマス『アリストテレス「魂について」註解』第2巻第2章(L.45.1, p.76, ll.153-157)「また、プラトンの考えによれば、アニマは物体の現実態であるが、それは形相としてではなく、動者としてであるから、アリストテレスは次のように付言している。船員が船の現実態であるように、つまり、ただ動者としてのみアニマが物体の現実態であるのかどうかはまだ明らかでない、と」(デ・アニマ註解, p.5)。また次も参照：トマス『ロンバルドゥス「命題集」註解』第1巻第8区分第5問題第3項主文(SS1, p.233)「彼らは、例えば船乗りが船においてあるようにしてあたかもたんに動原であるだけで形相ではないかのよう、魂が場所においてあるようにして身体においてあると想像した」；第2巻第1区分第2問題第4項第3異論解答(SS2, p.53)「プラトンは、ニュッサのグレゴリオスが語るように、船乗りが船においてあるようにして動原が可動的なものにおいてあるのと同様に、魂は身体においてあると措定した」；第8区分第1問題第2項第1異論解答(p.207)「そのような想定は、船乗りの船に対するような動原の動かされるものに対する何らかの合一に限定される」；『対異教徒大全』第2巻第57章(L.13, p.406a, ll.9-12)「そこで、プラトンと彼の追従者たちは次のように主張した。知性的魂が身体に合一しているのは、形相が質料に合一しているようにではなく、動かすものが動かされるものに合一しているようにである。だから、魂が「舟に船頭がいるように」身体の中に存在すると述べているのである」(心身問題, p.17)；『定期討論集 魂について』第11問題主文(L.24.1, p.98, ll.160-163)「プラトンは、船乗りが船においてあるようにして魂が身体においてあると言うことで、魂はただ動原としてのみ身体と合一するのであって形相としてではないということを措定した」；『知性の一性について』第5章(L.43, p.292, ll.84-91)「そこである人にとって、身体が現実に生きているということは、動くものが動かすものの現存によって現実に動くのと同様であるのか、それとも質料が形相の現存によって現実に存在するのと同様であるのかということが問題になりえたのである。しかもそれは、プロティヌスやニュッサのグレゴリウスが明らかにした通り一私がこの人たちを導入するのは、この人たちがラテン人でなくギリシア人であるからであるけれども—、特にプラトンが魂は形相としてでなくむしろ動かすもの・支配するものとして身体に結合しているとしたからである。／したがって前述したことに付け加えて「もっとも魂が身体の現実態であるのは、船乗りが船に対するような仕方であるかどうかは不明である」と言うとき、アリストテレスはこの疑問を抱いているのである」(中世思想原典集成 14, p.510)。

⁴⁷ Cf. トマス『神学大全』第1部第70問題第3項主文(L.5, p.180b)「いま、明らかに、天体の魂は、栄養摂取的魂の諸々のはたらき、つまり「身を養う」とか「成長する」とか「生む」とかのはたらきを持つものではありえない。こうしたはたらきは何れも、本性的に不可滅的な物体には適合しないのだからである。同様にまた、感覚的魂の諸々のはたらきも天体にふさわしくない。ただし、すべての感覚は触覚を基底としているのであるが、触覚は、諸々の元素的な

性質を把える感覚にほかならないのである。のみならず、諸々の感覚能力の器官も、すべて、諸元素の何らかの混合として、その一定の対比を要求する。だが、諸々の天体はこれらの元素の本性とはあくまで無縁なるものと想定されているのである」(神学大全 5, pp.102-103); 『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第11章(L.45.1, p.254, ll.113-117)「しかるに、生成しえないものであるものも感覚なしには知性を持たないとアリストテレスが言っていることは、アリストテレスの見解に即せば偽であるように見える。というのは、魂化されているとアリストテレスが指定する天体は、魂の諸部分の内に知性を持つ一方で、感覚は持たないからである。というのも、均一な物体は感覚のために必要とされる諸器官における区別を持たないものだからである」; アリストテレス『魂について』第3巻第12章 434b2-8「実際、一箇所に固着して動かない生物には、それが生い立った環境にあるものが栄養として存在しているが、固着するものでなくかつ生殖によって生み出されたもの場合には、その身体が、感覚をもたずに、魂や物事を識別できる知性をもっているということはありえない。(また生殖によって生まれたのではないとしても、それは不可能である。) というのも、いったいどのような理由で、そうしたものが感覚をもたずに知性をもつということがありうるだろうか。というのも、その理由となるのは、魂にとってないしは身体にとってより善いということであるかもしれないが、実際には魂と身体のいずれについても、そのほうがより善いということはないからである。事実、魂は感覚をもたないほうがいっそう知性認識できるということにはならないし、身体も感覚をもたないことによっていっそう益を得るというわけでもない。したがって、一箇所に固着しないのに、感覚を欠きながら魂をもっているというような身体は、まったく存在しないのである」(アリストテレス全集新7, p.174)。

⁴⁸ Cf. アリストテレス『魂について』第3巻 429a24-27「それゆえ知性が身体と混合しているというのも不合理である。なぜなら、もしそうだとすれば、知性は、冷であれ熱であれ、ある特定の性質のものということになるだろうし、さらには、感覚能力をもつものについてはそうであるように、ある特定の器官が知性についても存在することになるからである。だが、実際にはそのような器官はまったく存在しない」(アリストテレス全集新7, p.146)。

⁴⁹ Cf. トマス『四十三項目についての総長ヨハネス・ヴェルチェリへの解答』第3項(L.42, p.328, ll.99-101)「しかし、天体が霊的被造物によって動かされるということは聖人ないし哲学者の誰によっても否定されなかったと読み継がれていたと私は記憶しております」。

⁵⁰ Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第2巻第18章第38節(PL 34, 279-280)。

⁵¹ Cf. アヴェロエス『アリストテレス「自然学」大註解』第1巻第92註解(Venetiis, 1562, t.4, f.65E-F); アルベルトゥス・マグヌス『「天地について」註解』第1巻第3論考第8章(Col. t.5.1, p.73, ll.35-37)。

⁵² Cf. アヴェロエス『アリストテレス「天地について」大註解』第1巻 12-14(Venetiis, 1562, t.5, f.9v-11r)。

⁵³ Cf. アウグスティヌス『三位一体論』第3巻第8章第13節(PL 42, 875)「けれども、可視的なものの質料はあの叛いた天使たちに仕えてその指示に従うのではなく、むしろ神に仕えるのだと考えなければならない。神を高き霊的な御座にいます不変の方として判断する限り、天使たちの権能は神から与えられるのである」(アウグスティヌス著作集 28, p.107)。

⁵⁴ Cf. 『原因論』第15命題(Patin, p.168)「限りを有たないところのあらゆるちからは、諸々のちからのちからたる第一の無限に繋依するものである。というのは、そのちからは獲得されて諸々の存在する事物のうちに定存する一定不変のものではなくて、却って、一定不変性を得ている諸々の存在する事物にとってのちからなのだからである」(原因論, p.80)。

⁵⁵ Cf. アヴェロエス『地球の実体について』第1章(Venetiis, 1562, t.9, f.5vG-H)。

⁵⁶ Cf. 同上(f.5vH)。

⁵⁷ Cf. アヴェロエス『アリストテレス「形而上学」大註解』第11巻第44註解(Venetiis, 1562, t.8, f.318vH-I)。

⁵⁸ Keeler (p.81)によれば、『「命題集」註解』第2巻第14区分第1問題第3項や『定期討論集真理について』第5問題第9項第14異論解答では、トマスは霊的実体を天体の形相と見なそうとはしない。それに対して、『対異教徒大全』第2巻第72章や『定期討論集 魂について』第8問題第3異論解答では霊的実体を天体の形相と見なそうとする姿勢が見られる。しかしなが

ら、この箇所や『神学大全』第1部第70問題第3項では、再び靈的実体を天体の形相とは見なそうとしない姿勢を取っている。

⁵⁹ Cf. 同第7巻第31註解 (f.181rF).

⁶⁰ Cf. トマス『命題集』註解』第2巻第15区分第1問題第2項主文 (SS2, p.372) 「ところで、天体の運動における靈的実体の力が残されており、それは、動原の力が道具において残されるような仕方である」；『定期討論集 真理について』第5問題第10項第4異論解答 (L.22.1, p.171, ll.214-219) 「靈的作用者の道具が靈的力によって働くのは、物的力によって働くことからのみである。ところで、物的力によって天体は物体に対してのみ働くことができる」 (真理論, p.148) ；『対異教徒大全』第2巻第99章 (L.13, pp.594a, ll.22-30) 「また、もし哲学者たちが措定するように、分離実体が天体を動かすのであれば、天体の運動に由来するものは何であれ、天体が動かされるものを動かすのだから、道具としては天体に帰属される一方で、主要な能動者としては動かす分離実体に帰属される。ところで、分離実体は知性を通じて能動し動かす。したがって、職人が自分の道具を通じて作用するのと同様に、分離実体は天体の運動を通じて生じるものを原因するものである」；第3巻第23章 (L.14, p.56b, l.5 - p.57a, l.5) 「したがって、天の物体が生成に対して能動するのは、主要な能動者として固有の種に即してではなくて、何らかのより上位の知性的な能動者の種に即してであり、その能動者に対して天体は、道具が主要な能動者に対するようにして関わる」；第24章 (p.62a, ll.8-15) 「ところで、天は、それによって天が知性的実体から動かされるような自分の運動に即しては、より下位の運動の原因である。それゆえ、天は知性的実体の道具のようなものであるということが帰結する。したがって、より下位の物体の形相および運動は、主要な能動者としては知性的実体から原因され意図されているのに対して、道具としては天体から原因され意図されている」；『定期討論集 神の能力について』第5問題第5項主文 (QDP, p.143b) 「天は自身の内に存在するものとしては運動に対する単なる適性によって動かされるのに対して、既述のように、外に存在するものとしては能動的原理によって動かされるのだから、道具として動かされ能動する。というのも、こうしたことは道具の態勢だからであり、それは人工的なものにおいて明らかな通りである。というのは、斧においてはそのような運動に対する単なる適性がある一方で、運動の原理は職人においてあるからである。それゆえ、哲学者たちに即しても、動かされて動かすものは道具として動かす。ところで、道具を通じた能動においては、道具が人工物としてであって道具としてではなしに解されるという限りにおいて、附帯的にでなければ道具自身において何らかの目的が存在することはありえない」；第6問題第6項第10異論解答 (p.176b) 「天体は魂化されていないとはいえ、道具が主要な能動者の力によってそうであるのと同様にその力によって天体が能動するような生きている分離実体から動かされる」；『神学大全』第1部第70問題第3項第3異論解答 (L.5, p.181ab) 「天体は動かされて動かすものゆえ、それは根源的能動者のちからにおいて能動するところの「道具」という性格を持っている」 (神学大全 5, p.105) ；『アリストテレス「形而上学」註解』第12巻第9講 (EMA, p.598b) 「そして天体はいわば動かす分離実体の道具であるのだから、より上位の天球を動かす実体はより普遍的な懐念と力に属す」；『神学綱要』第1部第171章 (L.42, p.148, ll.55-74) 「したがって、以上のことから天の運動の目的を考察しなければならない。その理由は以下の通りである。知性から動かされる物体はすべて知性の道具であることは明白である。ところで、道具の運動の目的は主要な能動者から懐念された形相であり、それは道具の運動を通じて現実態へと引き出される。ところで、神的知性の形相——それを天の運動を通じて神的知性が完遂する——は生成消滅の道を通じては事物の完全性である一方で、生成消滅の最終目的は最も高貴な形相——それは人間の魂である——であり、その形相の最終目的は、上で示されているように、永遠の生命である。したがって、天の運動の最終目的は永遠の生命へと導き入れられるべき人間の多数化である。ところで、こうした多数性は無限ではありえない。というのは、任意の知性の意図は何らかの有限なものに依るからである。したがって、永遠の生命へと導き入れられるべき人間の数が完遂され、その人間が永遠の生命において構成されると、天の運動は止むことになるだろう。それは、業が完成された後には任意の道具の運動が止むのと同様である」。

⁶¹ 註24を見よ。

⁶² Cf. 『詩編』第148編第7-8節；『ダニエル書』第3章第52-90節。

⁶³ ダマスケヌスについては註24を見よ。Cf. ボナヴェントゥラ『「命題集」註解』第2巻第14区分第1部第3項第2問題第4異論解答(QR, 2, p.349)。

⁶⁴ 註30を見よ。

⁶⁵ Cf. ダマスケヌス『正統信仰論』第2巻第4章(PG 94, 873C-875A)；トマス『神学大全』第1部第63問題第7項主文(L.5, p.136a)「ダマスケヌスが、罪をおかした天使たちのうちの上位者も『地上の秩序を司る長上』たる天使でしかなかった旨を説いているのはこのためである」(神学大全4, p.393)。

⁶⁶ Cf. グレゴリウス『福音書教話』第2巻第34教話(PL 76, 1250 B-C)；トマス『神学大全』第1部第63問題第7項反対異論(L.5, p.136)「グレゴリウスは『百頭の小羊についての教話』のなかで語っている。『(罪をおかした)最初の天使は、天使の全軍団をひきいる長上として彼らの光輝を凌駕していたがゆえに、彼らと比較すればそのいずれにもまして輝やかな者であった。』と」(神学大全4, p.393)。

⁶⁷ G&S (p.192)に従って、《IV》を《VIII》と読み替える。

⁶⁸ Cf. アリストテレス『自然学』第8巻第10章267b7-9「そういうわけで、動かすものは〔天球の〕中央にあるか、あるいは、円〔球の周囲〕にあるか、そのどちらかでなければならない。これらが〔球の生成的〕原理にほかならないから。しかし、動かすものの最も近くにあるものどもが最も速く動くのである。そして、最も速いのは円の運動にほかならない。それゆえ、動かすものはそこにある」(アリストテレス全集旧3, p.366)。

(いしだ・りゅうた 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学／
日本学術振興会特別研究員 DC)

※本稿は、JSPS 科研費 15J0085 の助成を受けたものである。